

- 国内金利** : 横ばいで推移
- 株式市場** : 上昇基調での推移
- J-REIT** : 横ばい圏での推移
- 外国為替** : もみ合いの推移

日米主要経済指標、ご留意事項

マネーマーケットあらかると

ラニーニャ現象と商品市場への影響について

ラニーニャ現象とは、太平洋赤道域の日付変更線から南米沿岸にかけて海面水温が低い状態が続く減少を指し、夏は酷暑で冬は厳冬になる傾向があります。足元の干ばつや熱波など、異常気象の要因の一つとされているのが、2021年秋から続くラニーニャ現象の長期化です。

世界では異常気象がもたらす農作物への影響が懸念されています。米国では幅広い地域で干ばつとなり、小麦やトウモロコシ生産は影響を受けています。また、インドでは熱波が続いたことなどから、小麦の輸出を禁止しています。世界的な不作となれば、ロシアやウクライナからの供給不安もあり、穀物価格が高騰する可能性は高いでしょう。加えて、異常気象の影響はエネルギー分野にも及びそうです。酷暑や厳冬はエネルギー需要を高めるため、原油やガスなどの資源価格に上昇圧力がかかるでしょう。

もちろん今後ラニーニャ現象が早期に終息し、異常気象が減少する可能性もあります。ただ、ロシアのウクライナ侵攻が長期化し、世界的に物価上昇が続いている状況下においては、異常気象が商品市場を揺らす環境は継続するでしょう。今後のマーケットを見る上では、気候要因に注目する場面が増えるかもしれません。(菊 地)

マネーマーケットマンスリーは経済、金利、為替、株価についての情報提供を目的として作成したもので、取引等の勧誘を目的としたものではありません。

また、金融商品取引契約の締結の勧誘に使用するものではありません。投資に関する最終決定は、お客さまご自身の判断で行うようお願い申し上げます。

※本資料の使用に際し、最終ページを必ずご覧ください。

(2022.7.26 作成)

資金証券部 TEL: 042-526-7740

国内金利

■要約&ポイント

- 7月は海外中央銀行の大幅な利上げによる景気後退懸念から、金利は前月より低下
- 海外中央銀行が政策金利を引き上げる中、日銀は金融政策を維持
- 日銀による金融政策と海外の景気後退懸念で、国内金利は横ばいでの推移を予想

■7月の動き(1日～26日)

～小幅に低下～

【変動幅】

0.200%

～

0.245%

7月の10年国債利回りは小幅に低下した。海外の中央銀行が物価上昇に対応するため、相次いで大幅な利上げを実施した。このため、世界的な景気後退懸念が高まったことなどから、下旬にかけて海外金利が低下し、国内金利も低下した。
(26日時点の10年国債利回りは0.205%、先月末比0.020%低下)

■8月見通し

～横ばいで推移～

【予想レンジ】

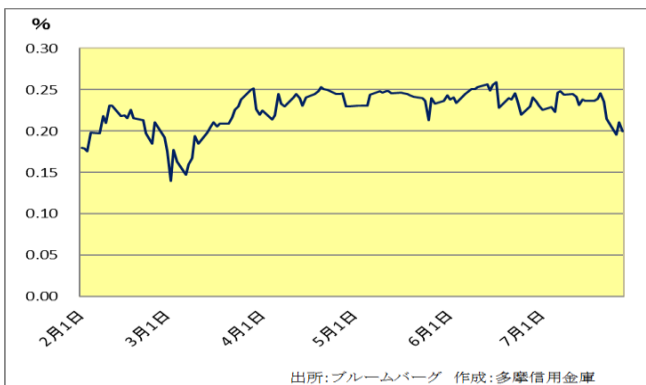
0.160%

～

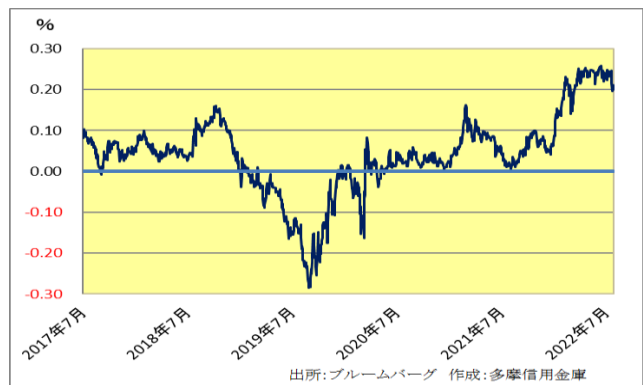
0.250%

海外中央銀行が利上げを進める中、日銀は7月20・21日に開催された金融政策決定会合において、大規模な金融緩和の維持を決定した。会合後の黒田総裁は記者会見で「金利を引き上げるつもりは全くない」、「粘り強く金融緩和を続ける」と従来の主張を繰り返した。
また、今後も海外中央銀行の大幅な利上げが見込まれる一方で、景気後退懸念も高まりやすいと思われるため、国内金利は0.25%程度を上限に、横ばいで推移するだろう。

【国内長期金利チャート(6か月)】



【国内長期金利チャート(5年)】



■今月の注目経済指標

～日銀短観～

6月調査の業況判断DIは、大企業製造業9(前回比▲5)、大企業非製造業13(前回比+4)と業種によってばらつきがみられた。製造業では中国のロックダウンなどの影響により景況感が悪化した一方、非製造業ではまん延防止等重点措置が解除されたことで、飲食サービスを中心に改善がみられた。ただ、足元では新型コロナウイルスの感染者数が急増し、「第7波」といわれている。そのため、夏休みシーズンを迎え、景況感の悪化が懸念されると思われることから、今後の感染動向等を注視したい。

(折原)

株式市場

■要約&ポイント

- 7月の日経平均株価は前月末比上昇
- インフレに対する過度な懸念が後退したこと等が上昇要因
- 8月の日経平均株価は上昇基調での推移を想定
- 主要企業の決算発表に注目

■7月の動き(1日～26日)

～上昇～

【変動幅】

25,841円

～

27,952円

7月の日経平均株価は上昇した。月の前半は、FRB(米連邦準備制度理事会)による急激な金融引き締めなどを背景に、世界景気後退の懸念が広がったため、26,000円台を割り込むなど不安定な推移となった。しかし、その後はインフレに対する過度な懸念が後退したことや、主要企業の決算発表が好感される中、上昇する展開となった。
(26日時点での日経平均株価は27,631円、先月末比1,238円上昇)

■8月見通し

～上昇基調での推移～

【予想レンジ】

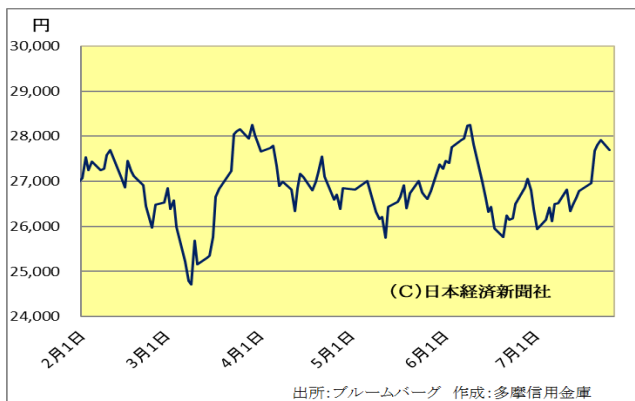
26,500円

～

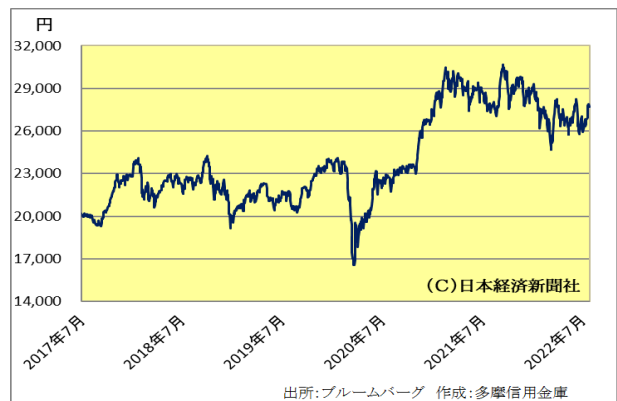
29,500円

8月の日経平均株価は上昇基調での推移を想定する。足元では、FRBによる過度な金融引き締めへの警戒感が後退しており、株式市場は落ち着きつつある。そのため、海外株式に比べ割安感のある日本株に注目した買いも見込まれるだろう。今後発表を控える国内企業の決算発表も、引き続き良好な見通しが確認されれば、株価の上昇要因となりそうだ。また、外国為替相場が円安ドル高で推移していることも、輸出関連企業には好影響を与えるだろう。一方で、国内では新型コロナウイルス第7波による感染再拡大が懸念されている。今後再び政府による行動制限などが行われた場合は、企業業績が下振れする可能性もあり、株式市場にとっては下落要因として意識されるため、注意が必要である。

【日経平均株価チャート(6か月)】



【日経平均株価チャート(5年)】



(鈴木)

J-REIT

■要約&ポイント

- 7月の東証REIT指数は小幅に上昇
- 米国金利の上昇が一服する中、投資家のリスク回避姿勢が和らぎ、中旬以降上昇
- 東京都心部オフィス空室率は高止まりが継続
- 8月の東証REIT指数は横ばい圏での推移を想定

■7月の動き(1日～26日) ～小幅に上昇～

【変動幅】

1,945ポイント

～

2,009ポイント

7月の東証REIT指数は小幅に上昇した。前半から中旬にかけては方向感に乏しく、1,900ポイント前半を中心に横ばいの推移となった。ただ、月の後半にかけて株式市場が上昇する等、マーケットのセンチメントが改善する中、REITにも資金流入が見られ、小幅に上昇する展開となった。
(26日時点での東証REIT指数は1,997ポイント、先月末比31ポイント上昇)

■8月見通し ～横ばい圏での推移～

【予想レンジ】

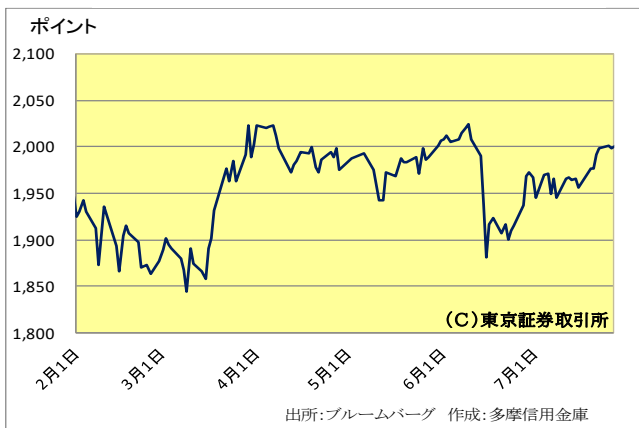
1,900ポイント

～

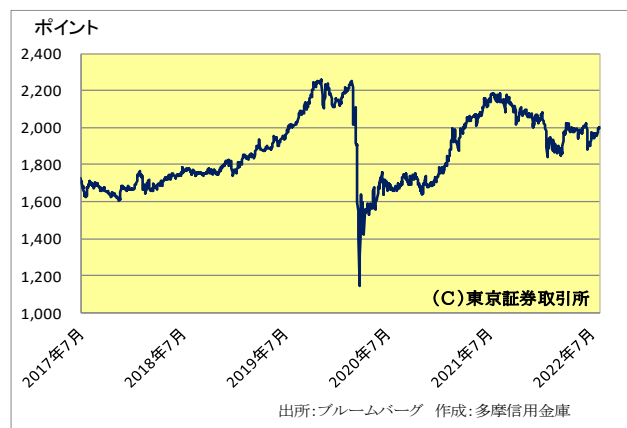
2,100ポイント

8月の東証REIT指数は横ばい圏での推移を想定する。足元新型コロナウイルスの感染が拡大しており、今後も増加傾向が続くと景気減速への警戒感等から投資家のリスク回避姿勢が強まる場面が想定される。また、東京都心部オフィス空室率の高止まりが継続する等、不動産市況に対する警戒感が続いている。このような環境下では、一段の上昇幅については限られるであろう。一方、国内では日銀の金融緩和政策が継続しており、国内金利は低水準で推移している。引き続きREITの約4%という高い配当利回りを背景に投資家の資金が流入するものと思われ、底堅い推移が見られるであろう。以上により、上下ともに動きづらく方向感が出にくいものと思われ、横ばい圏での推移になるものとする。

【東証REIT指数チャート(6か月)】



【東証REIT指数チャート(5年)】



(森久保)

外国為替

■要約&ポイント

- 7月のドル円相場は一時大幅な円安進行も、その後円高基調で推移し小幅な円安ドル高
- 7月に発表された6月の米国CPI(消費者物価指数、前年比)は9.1%と大幅な上昇
- CPIの結果からFRB(米連邦準備制度理事会)の利上げペースが早まる観測が浮上
- 今後は米国の金融政策の動向と米国経済への影響に注目

■7月の動き(1日～26日) ～大幅な円安進行も月の後半にかけて円高に推移～

【変動幅】

134円75銭

～

139円39銭

7月のドル円相場は、小幅な円安ドル高の推移となった。先月に引き続き米国のCPIが大幅な上昇となったことでFRBの利上げペースが早まるとの観測が浮上し、ドル円相場は一時139円台(1998年9月以来の水準)まで円安ドル高が進行した。ただ、その後は米国の景況感を示す指標等が悪化したことなどから米国の景気後退懸念が意識され円高ドル安となり、先月末比で小幅な円安ドル高となった。
(26日時点でのドル円相場は136円91銭、先月末比1円19銭円安ドル高)

■8月見通し

～もみ合いの推移～

【予想レンジ】

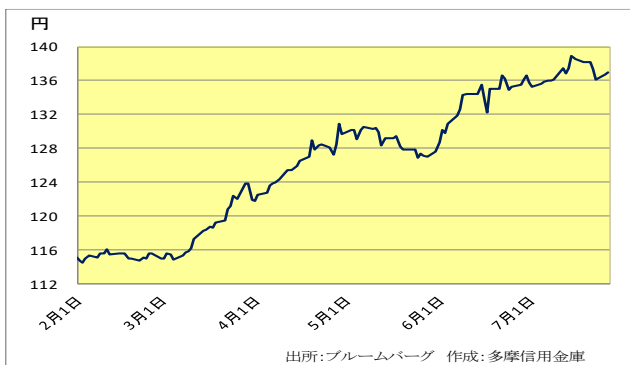
130円00銭

～

138円00銭

8月のドル円相場はもみ合いの推移を予想する。
米国のインフレ状況は依然として高い水準が続いており、FRBは当面の間はインフレ抑制を最優先として、早いペースの利上げを続ける可能性が高い。金融緩和を維持する方針を示している日銀との金融政策の方向性の違いは引き続き円安ドル高の材料となるだろう。
ただし、7月に発表された米国総合PMI(景況感を示す指数)は好不況の境目となる50を下回る結果(47.5)となった。FRBの利上げペースが早まる中で米国の景気減速懸念も台頭しつつあり、これが円高ドル安の圧力となっている。
FRBの利上げによる円安ドル高圧力と将来の米国経済の減速懸念による円高ドル安圧力から8月のドル円相場は方向感が出にくくもみ合いの推移を予想する。

【ドル円チャート(6か月)】



【ドル円チャート(5年)】



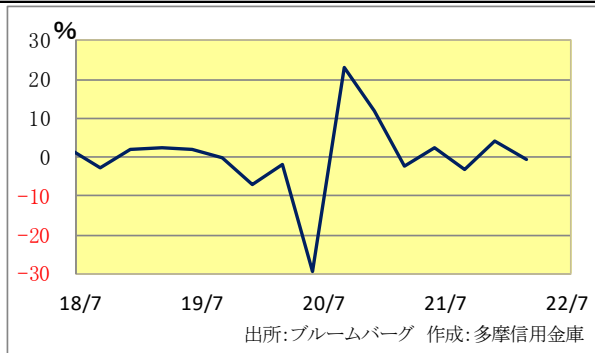
(池上)

日米主要経済指標

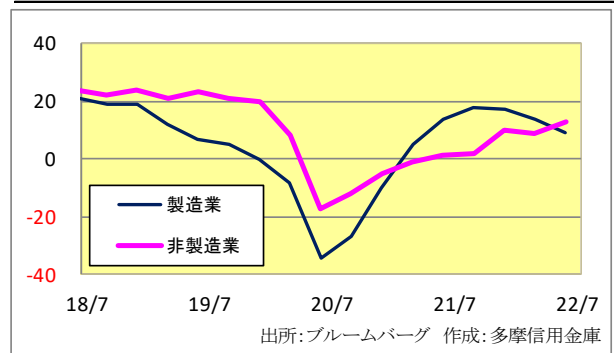
2022年7月26日 現在

(1) 国内経済指標

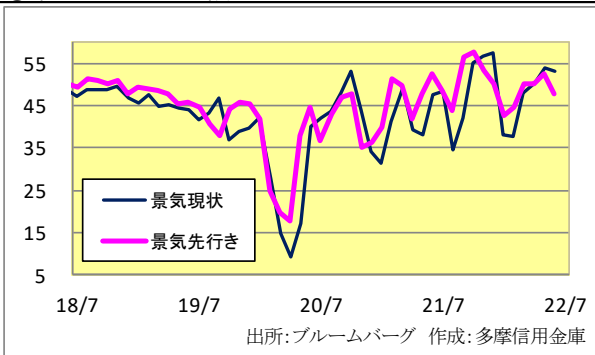
① 実質GDP (前期比・年率)



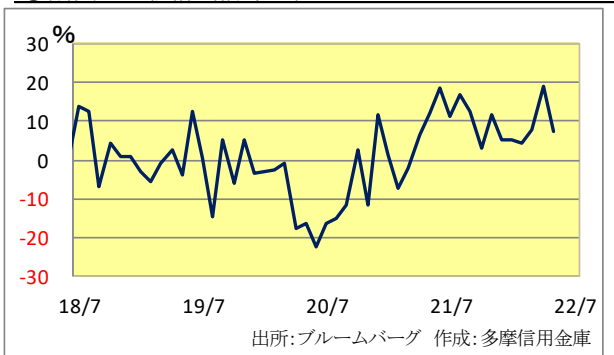
② 日銀短観・大企業業況判断DI



③ 景気ウォッチャー調査

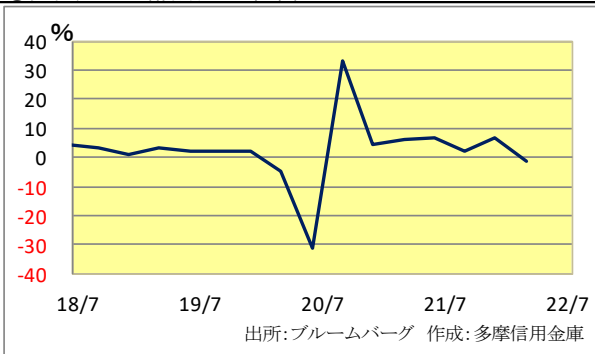


④ 機械受注統計 (前年比)

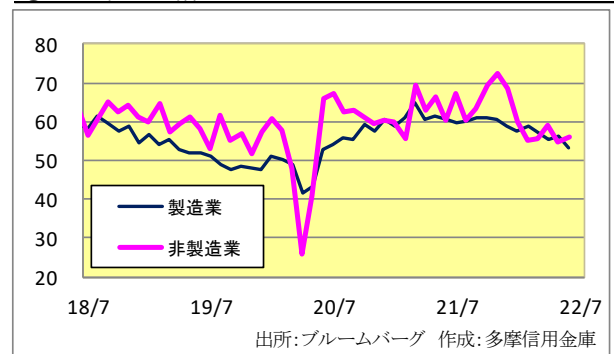


(2) 米国経済指標

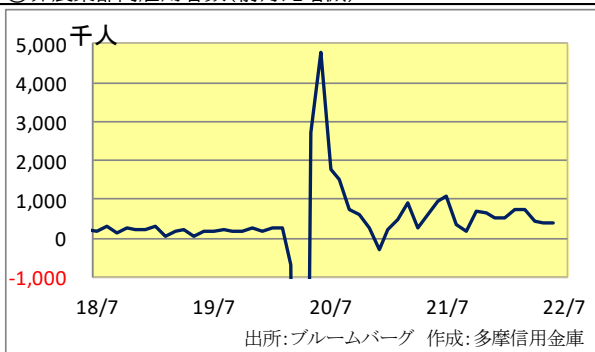
① 実質GDP (前期比・年率)



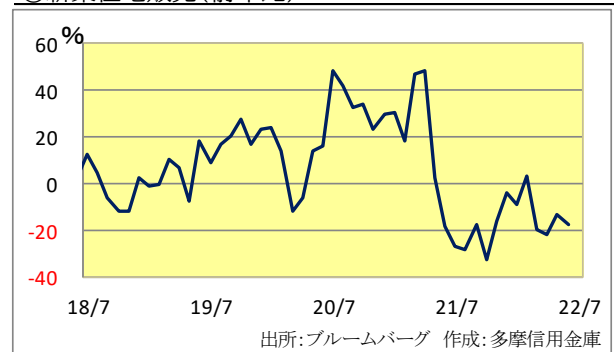
② ISM景況感指数



③ 非農業部門雇用者数(前月比増減)



④ 新築住宅販売(前年比)



※コロナショックにより過去の結果と大幅な乖離が見られるため下記表示を割愛
2020年4月実績値:▲20,787千人

ご留意事項

- ・本資料は、投資環境に関する情報提供を目的として作成したものであり、投資勧誘を目的とするものではありません。
- ・本資料は、信頼できると考えるデータに基づき多摩信用金庫が作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。
- ・本資料は記載されたいかなる内容も、将来の市場変動を保証するものではありません。本資料のご利用に関してはご自身の判断と責任でなされるようお願いいたします。
- ・本資料に掲載された各見通しは本資料作成時点での各執筆者の個人的見解に基づいており、それらは必ずしも多摩信用金庫の見解を反映しているとは限らず、また、予告なしに変更される場合があります。
- ・本資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的著作権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。